



企業労使の 「社会的地位向上努力」を考える

SAM日本チャプター理事・広島支部長
(株)ロジタント 代表取締役

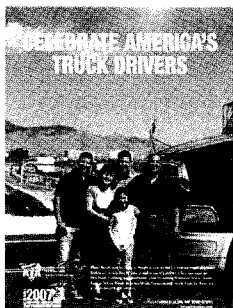
吉田 祐 起



トラック運送業界へ身を置いた32年間、満61歳の時、新会社を設立して「総合物流・経営コンサルタント」に転身。はやくも14年が過ぎました。数社のクライアント企業のトラックドライバー社員教育を手掛けて東西奔走しています。小手先のhow to doものでなく、how to be、つまり、運転上手より善良な運転者になることを心がけよう、といった人間教育を持ち味としています。技 (skill) より心がけ (will) を重視する、それは人間性向上への啓蒙教育でもあります。

昨年末、全国ネットのある協同組合連合会研修会で「事故防止担当者」を前に講演した時でした。冒頭にAorBの質問を投げかけて挙手で答えてもらいました。「A：トラックドライバーという職業は割のいい職業だとは思わない。同情したい気持ちを持っているEtc.」。「B：ドライバーは長時間労働や交通事故リスクを伴い賃金はその割にいいとは思わないが、好きなハンドル握ってまああの収入。真面目にやれば失業することもない。成果主義や終身雇用制崩壊で一般勤労者の心身ストレスや不安感などを考えると、実力主義が当たり前のドライバー職。運転（勤務）中にラジオニュースや好きな音楽を聴けるなど、ある種の羨ましさを感ずる」がそれでした。意外な反応でした。Aが半数近く。すかさず私は大胆に言ってのけました。「Aに手を挙げた方は、今から私が話すことを聞いてくださって、Bの立場になるよう努力してほしい。万一、それが出来なければ、即刻、職種替えされたほうが賢明ですよ！」と。主催者側の専務理事（国交省OB）は私の顔をみながら頷かれました。

すべての企業「労使」にとって大事なことは、自らの職種・職業に対する応分の自負心を努力して保つことが大事です。それが出来ねば、さっさと職業替えすれば良いと言えるでしょう。トラック運送業界の企業「労使」に限って言えば、のことですが、トラックドライバーの社会的地位が低いと卑下する傾向が否定できません。その割に、どうしてそれを引き上げるべきか、といった論議や努力が労使双方に足りません。「トラックドライバー帝王学のすすめ」と題する単行本（全364頁）を出版した身であるだけに、歯がゆい思いを禁じ得ません。そんな折、米国のトラック運送業界との接点を多く持つ私が手にした資料があります。わが国も斯くありたい！ と願いつつ、ドライバーに掲示してガッツ感を喚起しているのです。右の写真は米国ブッシュ大統領サイン入りの感謝メッセージです。



左は米国大衆紙「USA TODAY」(28/September/2007) に全面広告されたお祝いを受けるドライバー家族。「“Without Trucks America Stops” (トラックが無ければアメリカ<のすべて>が止まる)」を標榜する米国トラック協会 (ATA) が恒例とする「National Truck Driver Appreciation Week (全国トラックドライバー感謝ウィーク)」を迎えてのもの。国民性の差異、と簡単に片付けては夢がありません。見習うべきは大いに見習うべし！ 今後とも、業界労使の社会的地位向上に微力ながら取り組みたいと願っています。

